
かりん ～もう一つの吸血鬼一家～

竜王 & 竜姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かりん 〜もう一つの吸血鬼一家〜

【Nコード】

N5995T

【作者名】

竜王&竜姫

【あらすじ】

吸血鬼…それは血を吸って生きているモノ。

これはそんな家庭に生まれた一人の異端吸血鬼の少年の物語である。

更新は他の作品が行き詰まった時に気分転換として行いますので滅多に更新しません。

プロローグ

side???

「おはよう…… っても誰も起きてないよな」

誰もいないリビングに立ち。

俺は呟いた。

現在の時刻は6時半、一般的な家庭ならば誰かしらは起きているだろう。

「とりあえず暮葉くれはを起こさないとな」

そう言つて俺は頭を掻いた。

あいつの部屋には入りたくないんだよなあ……

「あ……おはよう、お兄ちゃん……」

俺がリビングから出ようとするねほと寝惚け眼で目を擦りながら暮葉がドアを開けて現れた。

珍しく自力で起きてきたな……

「おはよう、暮葉。顔を洗つてきな」

「はい……」

寝惚けながらも暮葉は洗面所に歩いていった。
さて、今の内に朝御飯を作らないと。

「おはよう、もみじ桜」

「母さん？おはよう、珍しいね？この時間に起きているなんて」

台所に入ると母さんが料理をしていた。
味付け大丈夫かな？

「たまにはね。母親らしいことをしたいのよ」
「ふん…って！母さん、塩入れすぎ！！」

母さんは言いながら塩を大量に鍋に入れていた。
あれじゃ、しょっぱすぎる！

「あら？……き、気にしな〜い」
「いや、気にしてくれ！！」

俺の指摘に母さんは苦笑いを浮かべながら言った。
料理なんて滅多にしないんだから…

「はふう〜…」

「極々自然に背後から抱き着くな。微妙に濡れているぞ、暮葉」
顔を洗い終えたのが暮葉が背後から抱き着いてきた。
って母さん！！

「今度は醤油の入れすぎ！！」
「だ、大丈夫よ？私の料理は後半に挽回するんだから！」

料理には挽回も何も無いよ…
母さんの言葉に俺は膝をついた。
父さんはまだ寝ているんだな…

「……………母さん、頼むから料理は調味料の量を守ってくれ」

「ぜ、善処するわよ？」

無駄だと分かつてはいるが俺は言った。

父さんと母さんは味を感じないからどんな味でも大丈夫なんだろうけどさ…

暮葉はともかく俺は一生味を感じるんだぞ…

「はぁ……」

俺は背後にくつついている暮葉を引き剥がしながら溜め息を吐いた。

日常と転校生

side 第3者視点

「おっす、おはよう。椀^{もみじ}」

「ああ、おはよう。悠司」

学校——^{しこうば ちやうはん}椎八場一高に着き教室に入った椀はクラスメイトの一人、
菊池^{きくち ゆうじ}悠司と挨拶をした。

「なあ、聞いたか？今日、転校生が来るらしいぞ」

「転校生？それは確かなのか？」

悠司の言葉に椀は不思議そうに聞き返した。

その言葉に他の男子生徒達が騒ぎ始める。

「ほら、転校生と言ったらやっぱり美少女だろ」

「だよな！」

男子生徒達の会話は声が大きくクラス中に聞こえていた。

「美少女だなんて夢見てこれだから男子は…」

「転校生といったらやっぱり美少年でしょ！」

男子生徒達の騒ぎに女子生徒達が反応し騒ぎ始めた。

しかし、会話の内容は男子生徒達がしていた内容とほとんど同レベルだった。

そんな中、一人の女子生徒が教室に入ってきた。

「あ、果林おはよう」

「おはよう、麻希。どうしたの？ なんだか騒がしいけど」

教室に入ってきた女子生徒、真紅^{まあか}果林^{かりん}は教室の騒ぎについて幼なじみである女子生徒、時任^{ときとう}麻希^{まき}に尋ねた。

「ん？ 菊池くんが転校生が来るって言ったらこんな感じにね」
「転校生？」

麻希の言葉に果林は首を傾げた。
その表情はほんの少しだけ顔色が悪かった。

「ん？ おい真紅、体調でも悪いのか？」
「あ、紅蓮^{こうれん}くん。大丈夫だよ」

果林の顔色が悪いことに気付いたのか、紅蓮^{こうれん}は尋ねた。
その光景に麻希は意地悪く笑みを浮かべた。

「おやおや？ 朝から仲が良いね？」
「茶化すなよ。つーか真紅の顔色をしてみる」

麻希の言葉に紅蓮は呆れたように答えた。

「そつえば紅蓮くん。紅蓮くんって何時から果林と話すようになったの？」

「いきなりだな？」

不意に麻希は紅蓮に尋ねた。

「だって奥手な果林が普通に会話を出来るんだよ？ 気になるでしょ」
「そんなもんか？ というか簡単な理由だぞ？」

麻希の言葉に椛は悠司に尋ねた。

しかし、悠司は苦笑を浮かべただけだった。

「単純に俺の親と真紅の親は知り合いなんだよ。といつても数日前に知り合つた程度だけど」

「な〜んだ。果林と付き合つてるわけじゃ無いんだ」

椛の言葉に麻希はおどけたように答えた。

その様子に椛は呆れていた。

「んなわけ無いだろ。真紅にはもつと相応^{ふさわ}しい奴がいるさ」

「え？あ、ありがとう／＼／＼／」

椛の言葉に果林は顔を赤くして礼を言った。

その光景に男子生徒達から舌打ちや何かが折れる音があがつた。

side out

side 紅蓮椛

にしても真紅の家に挨拶に行ったときは驚いたな。

^{ヴァンパイア}吸血鬼で2人兄妹は多いと思つていたけど…

まさかの3人兄妹だもんな。

「あれには驚いた」

「どうかしたの？」

俺の呟きに隣を歩いていた真紅が尋ねてきた。

それに対して俺は何でもないと言を横に振つた。

「それにしても転校生が来ないな？もうすぐ二時間目だぞ」

「確かに不思議だな」

次の授業は体育で俺の呟きに悠司は頷いた。
現在、俺達は次の授業のために移動中だ。
真紅はやはり体調が悪いのか体育着に着替えていない。

「今日はサッカーみたいだな」

「よっし、さっさと準備体操を終わしてやろうぜ」

悠司の言葉に俺は頷き準備体操を始めた。

準備体操を始めてしばらくすると担任の白井先生が制服姿の男子生徒と並んで歩いてきた。

「ちよつと1年D組の皆さん、注目〜〜〜！」

白井先生は大きな声で呼んだ。

どうやら転校生はあの男子生徒みたいだな。

「今日からこちらのクラスに入ることになった転校生を紹介しま〜す」

「雨水^{うすい けんた}健太です。……ども」

白井先生の言葉のあとに転校生、雨水が答えた。

……………なんか目付きがこええな。

「ちよつ、果林!？」

「先生また真紅さんがーっ!」

見ると階段のところに座っていたはずの真紅が倒れていた。
その後、時任の付き添いのもと俺が真紅を背負い保健室まで運んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5995t/>

かりん　～もう一つの吸血鬼一家～

2011年10月7日23時01分発行